

山村の生業——その変遷と地域比較

岩 田 憲 二 石川県白山自然保護センター

OCCUPATIONS IN MOUNTAIN VILLAGES—THE CHANGES AND REGIONAL COMPARISON

Kenji IWATA, *Hakusan Nature Conservation Center*

はじめに

出作り地において商品生産活動が盛んであり、出作りが少なくなった今日においてさえその活動の痕跡が土地利用上認められることを前回報告した(岩田, 1984)。出作り地では、杉苗生産、養蚕、製炭、木材加工といった商品生産活動が現金収入源となり、それらが、自給を目的とするナギ畑による穀物生産、キャーチ(常畑)での野菜等の補助食料生産、及び野生食用資源の採集活動と結びつく複合生産形態が発達した。

自然条件が厳しい山間部で、一戸ずつ孤立した生活を送る出作りが成り立った理由としては、前記のように商品生産活動と自給生産がうまく結びついていたことが考えられる。こうした生産形態がブナ帯農林業集落の類型にあてはまることも前回指摘した(岩田, 1984)。

ここでは、複合生産形態を成す山村の生業が年間を通じてどのように移り変わり、また、高度経済成長期の前と後では山村の生産構造がどのように変容したかを、二つの山村(石川県白峰村と山形県小国町)を例として明らかにする。あわせて、両者の地域比較も行ない、類型化を試みる。

なお、白峰村の生業については、筆者がこれまで聞き取りをした同村下田原のY家を事例として取り上げるが、小国町については既出の論文(山本・田林, 1981)より引用した。

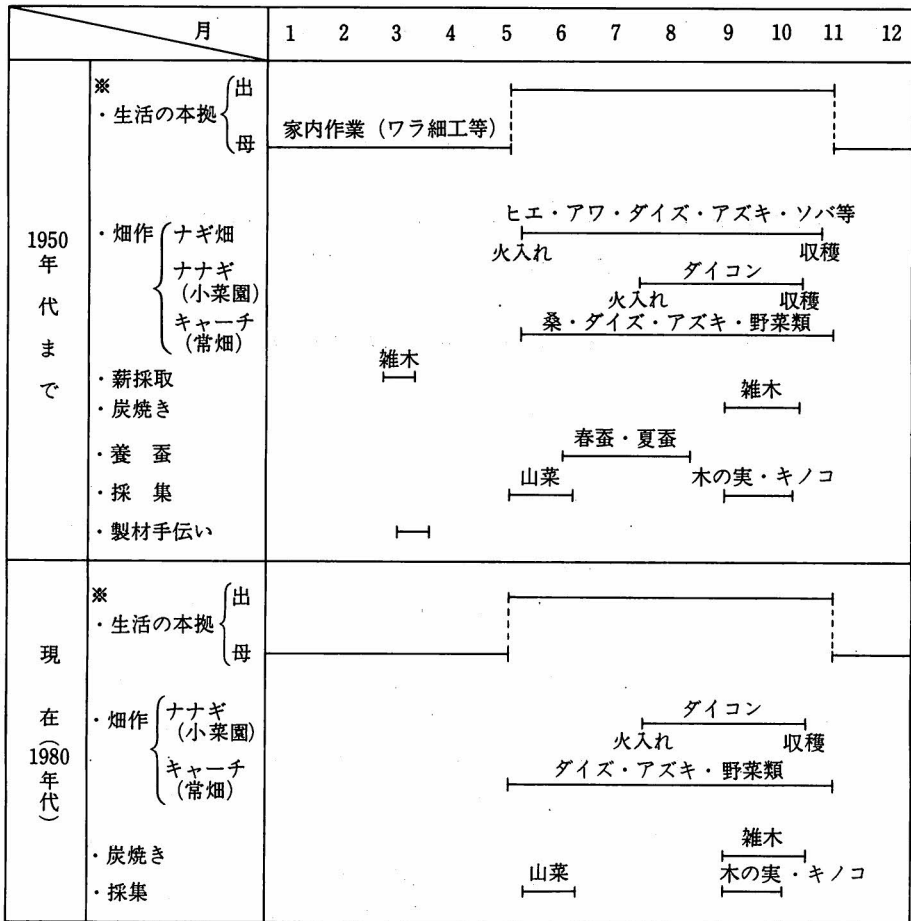
白峰村の生業の変遷

前回の報告(岩田, 1984)では、白峰村の二地域——下田原と赤谷——での出作りの実態を紹介し、その中で、年間の生業の変遷については約50年前の調査例(加藤, 1935)から引用した。ここでは加藤(1935)の例を引用するのではなく、下田原のY家で聞き取りした1950年代までと1980年代の生業を事例として取り上げる。一般に山村では1950年代までは伝統的生活が色濃く残っていたのに対し、1980年代には大部分が欠落したから、対比をするうえでは両者とも望ましい年代といえる。

Y家の生業は図1のとおり、今も昔も基本的には山地利用形態が中心となる。つまり、自給用、商品生産用とを問わず、山地において農耕、有用産品の採集が行なわれてきた。1950年代までの製材手伝いが唯一の賃金労働といえるが、これにしてもその原材料たる原木は山地から搬出されたものであり、間接的に山地利用とかがわっていると考えられる。

しかしながら山地利用の質の面では今と昔では大幅に異なる。1950年代までは、山地にある各種有用資源を利用することにより実質的に生活が成り立っていたが、現在では山地利用だけで生活を成り立たせることは不可能である。昔は、ナギ畑、養蚕、炭焼きといった山村特有の生産活動が生業とし

図1 Y家の年間の生活サイクル



※出：出作り地 母：母村(昭和49年までは白峰村桑島，以後は金沢市)

て成りたつだけの社会的背景や経済的要因があった。例えば、ナギ畑により生産された穀物(ヒエ・アワなど)は、終戦後しばらくの間まで主食として米と併用された。穀物食は白山麓のみならず、全国の焼畑地帯では戦前、あるいは終戦後まで見られ、いわばコメ文化とは別個の食事文化が存在していた。また、養蚕、炭焼きはY家の主要現金収入源となっていたが、両者は需要があったゆえに成り立った生業といえる。

そうした伝統的生業が現在でもY家にいくつか残っているのは、同家が出作りをおこなっているためであり、典型的の山村ともいえる白峰村においてさえ今では例外的で

表1 白峰村の産業構造の変化 (白峰村史上巻、村勢要覧より)

産 業	業 種	昭和26年	昭和50年
第一 次 産 業	農 業	1,001 ^人	34
	林 業	304	82
第二 次 産 業	鉱 業	0	15
	建 設 業	285	326
	製 造 業	251	147
第三 次 産 業	卸売・小売業	27	81
	公 益 事 業	73	52
	サ ー ビ ス 業	10	168
	公 務 及 び 団 体	41	50
	そ の 他	50	1
計		2,042	956

ある。実際のところ、図1の変遷過程を白峰村の代表例とは認めがたい。これはあくまでも、出作りの生業の変遷例である。白峰村全体の生業の移り変わりを客観的に把握するために、産業別人口の変遷表を参考として掲げる(表1)。

小国町の生業の変遷

山形県小国町は山間部のブナ帯山村で、しかも積雪地であるという点で白峰村と似ている。従って、白峰村と小国町ではその生業に類似点が多いことが考えられる。特に、高度経済成長以前の伝統的生業は、より類似性が強いものと考えられる。筆者が小国町を例として引用したのはそのためである。

図2より小国町山間部の1955年頃と1980年の生業の変化を考察すると、ここも高度経済成長以後に伝統的生業があまり見られなくなった。1955年頃には、水稻作を別とするとほとんどが山地利用の生業を行っていた。山地の有用動植物が豊富で、それを利用する技術も確立されていたことがわかる。

1980年になると、伝統的生業の多くは姿を消し、林業労務、(土木工事の)日雇、出稼、通勤・自営といった賃金労働の職業が増加した。これは、高度経済成長以後の日本の山村に見られる典型的な就業パターンである。いずれにせよ、伝統的生業から賃金労働という変遷パターンが小国町では見られた。

白峰村と小国町の地域比較

白峰村と小国町を比較すると、1950年代の生業については類似点が多い。冬季のワラ仕事、山菜・キノコ・木の実採取、薪採取、ナギ畑(焼畑)が共通の生業であり、いずれも山地利用による。その中でナギ畑については、白峰がヒエ中心の主食用穀物生産であったのに対し、小国町の場合はソバ、アズキ、大根といった補助食中心であったのが特徴である。やはり、小国町では水稻栽培がなされているために、こうした違いが出てきたものであろう。

この他、木地づくり、狩猟(クマ)については小国町にあって、白峰にはないが、正確に言えばY家の生業の中にないのであって、広く白峰村全体をみるとそうではなかった。白峰村三谷で盛んに製造されたコシキ(ブナ製の除雪用具)は、木材加工という観点からみると、小国町の木地づくりとよく似ており、しかも両者とも冬の屋内作業として行なわれた。また、狩猟(クマ)にしても白峰村では古くから行なわれてきた。こうしてみると、白峰村と小国町の生業は1950年代については似ている部分が多いといえる。ただ、古くから稲作が行なわれてきた小国町(山本・田林, 1981)と、コメ文化が近年まで定着しなかった白峰村を同一に類型化することはできない。市川・斎藤(1979)による「ブナ帯における農林業集落の類型」から考えると、1950年代の白峰村は、「自給的畑作農業十副業(木製品製造・狩猟・自然物採取)」というグループに類型化される。小国町の場合には、これに自給的稲作農業が加わる。1950年代までの生業を比較すると、以上のように稲作の有無によって、二つの山村が別々に類型化されることがわかる。

1980年代の生業については、Y家と小国町を単純に比較することはできない。1980年代のY家に見られる生業は、白峰村では極めて少なくなり現在ではむしろ特殊な例といえる。Y家ではなく、白峰村全体としていえることは、公共事業(土木、造林)の増加に伴って、賃金労働従事者が増加したことである(表1)。必然的に農林業従事者は減少している。1980年の小国町の生業も、図2より、林業労務、(土木)日雇、通勤・自営の比重が増したことがわかる。高度経済成長を経た1980年代とい

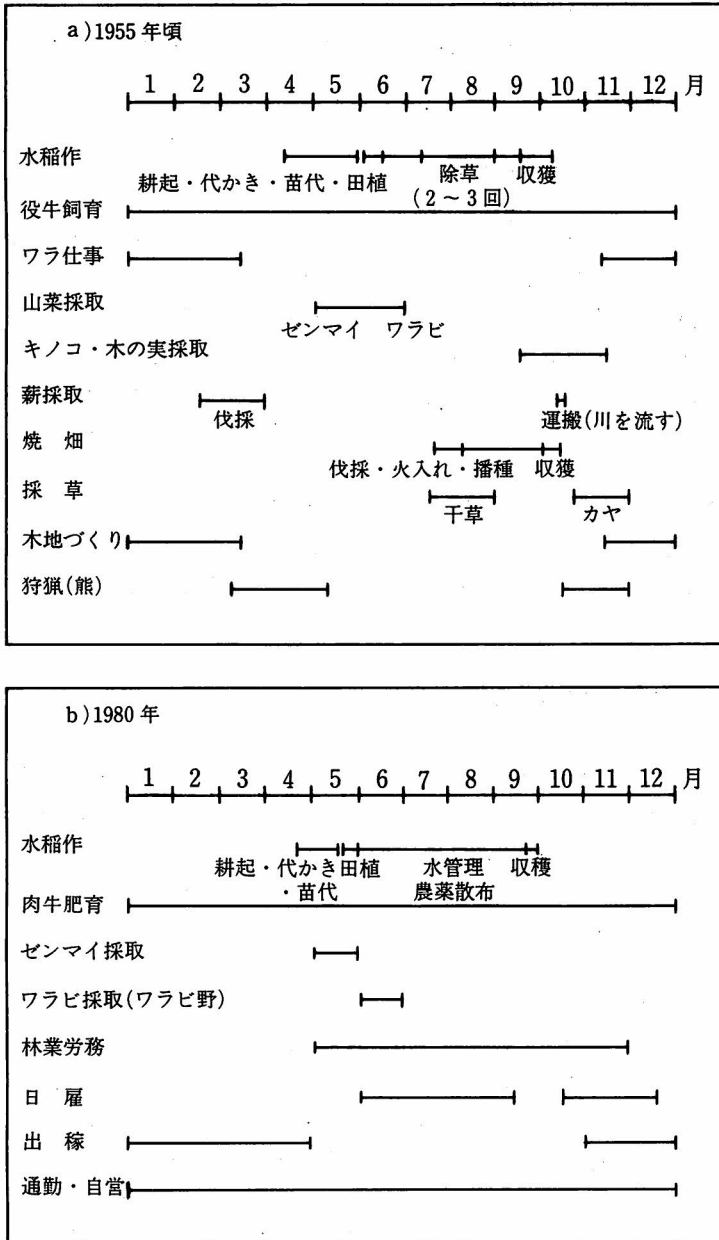


図2 山形県小国町山間部の主要生業の変化 (山本・田林, 1981より)

う段階では、生業の種類自体が複雑化し、多岐にわたっているため、1950年代の事例の際に試みた山村の類型を行なうのは難しい。ここでは、単に両者の類似点をあげるにとどまる。

む す び

石川県白峰村と山形県小国町の生業を、1950年代と1980年代の両時点において比較するという、時間的および空間的な差異あるいは類似点を求める作業を行なった。両山村とも、1950年代には山地利用に重点を置いた生業が中心ではあるが、稲作中心か(ナギ)畑作中心かの違いがあるために、両者を同一グループに類型化することはできなかった。1980年代の生業については、両山村とも第二次・三次産業——つまり賃金労働——中心に変わったことがわかる。

遠く離れた白峰村と小国町で伝統的な生業が1950年代にみられたのは、両者がブナ帯山村でしかも積雪であるからという理由づけが考えられる。しかし、より深く考えると、山地利用に生業の中心を置く生活文化を両山村とももっていたのではないかという仮定もなり立つ。ここでは文化論にはこれ以上立入

らないが、山村の生活文化を考えるうえで白峰村と小国町の類似性は何かの手がかりになるものと考えられる。

1980年代における両山村の生業は、広く全国の農山村に見られるので、特に指摘することはない。

文 献

市川健夫・斎藤 功 (1979) 日本におけるブナ帯農耕試論, 地理 24 卷 12 号, 84—102.

岩田憲二 (1984) 白峰村における出作り地の土地利用について, 石川県白山自然保護センター研究報告第 10 集, 111—119.

加藤助参 (1935) 白山々麓における出作の研究, 京大農業経済論集, 245—351.

白峰村 (1962) 白峰村史上巻.

山本正三・田林 明 (1981) ブナ帯と照葉樹林帯の山村の比較, 地理, 第 26 卷第 4 号, 60—70.